

包はシステムにより大石雄介が主宰します。

システム要領

1. 俳句、散文とも分量に制限なく、締切りも各人の自由とする。
2. 各人は、自稿を読ませたい相手に送稿する。その際、送稿がシステムによることを明記する。(注参照)
3. 編集・発行権は原稿受取人に属し、集まった原稿から随意に雑誌をつくることができる。その発行、公開等も随意とする。
4. 発行、公開された雑誌の一冊は、出稿者に送本することとする。
5. 発行経費は、発行者の個人負担とする。
6. システムの新しい中間への趣旨徹底は、各人の責任とする。

(注) 送稿の際は下記に統一して下さい。
〈当送稿はシステムによります〉

包13号目次

大石雄介句録(6) / 大石雄介

包・ぱお
13号
2002.1.1



大石確介句録

6

(413

9/1
1/30)

秋の出水軽鴨人より迅く流れ

葛の花まが叩かれて存任す

秋の出水の首のところが捨て自転車

わむい體がぼくと流れる夏の夏

わむい體が夏の暮かたちかな

わむい體とわむい體の銀河かな

わむい體が君の若神は寒い

夕バコ火と夕バコにつなぐ天の川

天の川見えない軽鴨鳴かないよ

人の高さには鴨立庵の女郎蜘蛛

蚊に食われている銀猫碑の前かな

秋晴の漁網店なる大きな家

すずめ蜂の巣は日輪のこちうにあり

寝て見ている銀杏の銀蟬の蟬せん

人の家の葡萄の赤さ呆と鳴るよ

掌に朱の薫る積む虫かな

朱の菌が朱のきのことなる秋有り

9/2

2

9/1

1

隈	女	菊	日	菊	白	数	行	蠅	羽
ど	声	芋	焼	芋	鶴	珠	っ	取	裂
り	の	黄	け	の	鷄	玉	て	蜘	け
強	少	花	と	花	の	と	し	蛛	た
き	年	陸	剥	ひ	顔	雀	ま	と	る
あ	に	上	き	ら	か	心	っ	い	鳩
い	ち	部	言	ら	白	つ	た	つ	や
は	や	は	う	つ	く	か	足	か	秋
か	夏	長	君	ね	こ	る	高	り	の
は	か	身	ら	に	蹤	千	蜘蛛	あ	雨
ら	ら	瘦	今	な	い	年	の	っ	飲
け	秋	身	は	細	て	か	日	て	み
て			ど	く	中	な	で	一	お
ゆ			こ	て	け		あ	日	り
く			に		り		る	か	
			い					な	
			る						

9/4

4

え	抱	長	足	養	夏	こ	青	日	乾
ご	い	い	弱	護	の	の	鳩	や	坤
の	ま	子	き	学	人	秋	の	月	と
木	る	と	女	校	呂	は	胸	や	は
の	る	寝	郎	の	律	自	の	あ	楊
実	教	こ	蜘	岸	回	転	い	か	梅
と	珠	ろ	蛛	セ	ら	車	ち	う	の
濁	玉	く	は	セ	ぬ	か	ば	や	時
ら	道	で	露	リ	歌	な	ん	が	は
せ	は	い	わか	回	を	な	青	め	楊
る	滑	る	かな	す	回	す	い	は	梅
雨	る	秋					と	か	
と	か	の					こ	く	
思	な	道					ろ	も	
う								赤	
								し	

9/3

3

夏から秋息むとつせが青胡桃
 白秋明菊の白さが落ちていたり
 草の実引く軽鴨水にぶらさがり
 葛の花が君の銀河と打つなり
 時は牙白壁のぼる雨蛙
 鳥のびとく猫のびとく秋の河原にあり
 白鷺が虎杖の穂に交じりゆく
 エロ本の洋種山牛夢の黒い笑
 いほ草に染まって見えなくなつたよ
 双盤つき東子ささげて無月かな

夕バコ火や青柿は青を抱きおろし
 明神岳や秋の緑は雲を写し
 昼の銀河モノゴレはう何と打つか
 魚屋伝いに人をたずねる鰯雲
 むつかしき秋の冷房の電源かな
 鷹と十二舟秋暑の部屋この机に
 鏡のような女郎蜘蛛の巣がありぬ
 秋の雲くずれてにびきものとなれり
 秋の雲くずれて川濁るほどに
 洋種山牛夢実となるバイクの頭もある

捨て自転車の筋肉あたり木槿かな
 秋のけしほ人間に透けているなり
 投げた體がまだ離れな秋の雨
 投げ出してこの體沙漠にはとどかぬ
 投げ出して奇妙なぼらぼら秋の風
 虫の夜や妹に金貨されんとす
 かゆみ止めの球状突起虫の夜
 わか窓辺は大やん子下るところかな
 野良猫や夏瘦せても目を人にあてる
 明神岳や秋暑の平家ポンキを塗る

9/8

9/7

8

こおろぎの顔を見ていて夜明けたり
 チョークにまみれ蠅取蜘蛛の骸かな
 手と痺れさせ目を抜いて秋の雨
 目をつむると螢光灯平行線松虫
 水着と板く夢を見ている秋の雨
 虫の夜の蛸足配線の部屋かな
 ポンキ職人よ原爆落ちる平家かな
 白粉がら花の実の黒と白恋人たち
 泣きながら英語読む曼珠沙華の夜
 殺蚊具と降圧剤なしには過こせぬ

7

台風来 明神岳からテレビまでの距離
 台風来 相懸心り不可解な體かな
 又風三顆賜りたるだけ夏瘦せず
 台風来 性飲は君ら異るらし
 数珠玉と空気を浴びて来たよ
 空気が銀葉ひまわりを打ちおろし
 稲田なる空気が牙のこくとキ空気を
 台風近し五位鷺平飛ひして落ちたり
 朝顔はやいれ愛人は濡れたリ
 アルミ缶は風船爆弾のこくと雨浴び

9/10

10

雨の夜の三日月を二重見たり
 酒精かつ精神かつこおろぎが並んで
 蚊取線香一巻か一日のかどに
 器にのる酒精の固さこおろぎたち
 酒精无から零れて虫の羽かな
 野良猫と三日月しなやかほくに降るよ
 酒精二片々と秋の雨のかたち
 タバコ火を踏めば音たて天の川
 台風来 投げ出せば力要らぬ體
 台風来 ばらばらで一つの體かな

9/9

9

赤い袋は梨が手首か静かなり	隣の子その隣の子曼珠沙草	濁流のあと曼珠沙草ゆとりなす	足長蜂と部屋に入れてそれからとす	冬風や四個の銀が四個の虚に	冬風や旅客機自爆テロも冬風	台風よがるハーンと水買いに会いに行く	台風よがる極真空手道場木槿	台風よがる君は雲に照らされて	台風来明神岳はふところ銀なす
---------------	--------------	----------------	------------------	---------------	---------------	--------------------	---------------	----------------	----------------

9/12

12

台風よがる茄子の花は淡きかな	台風来存在か雨と打つはじむ	台風来濁流はわか日日よりと高く	帰るなぐ掌のいやの蝶かな	祈るかたちは泣くとき台風が来ている	台風来頬を打たすはセクスに似る	台風来雨と涙は同じ音す	台風して自動販売器雨の砦	玄関なるハハラツク曼珠沙草かな	台風来濁るぬ堀の青さかな
----------------	---------------	-----------------	--------------	-------------------	-----------------	-------------	--------------	-----------------	--------------

9/11

11

葛の花はセクスのごとし立ちにけり
おしろいの実はことごとく飛ばしけり
四肢投げ出せばわか天の川陰茎あり
自転車に自転車のせて秋の雨
ぼうぼうの手足かほくの天の川
杜鵑草は彼が咲かせる彼らが食う
杜鵑草が散弾銃ほごに打つなり
瑠璃たてはか飛んぱと思ひ自覚めたり
虫取してぼうぼう雨ばうばう日
見ているとかわうけつめいに笑か入る

14

秋の出水箱状のもの浮かべたり
日に何度かこおろおろか跳ぶところなり
台座一過捨て自転車か天にかかる
みどりの蛾のその真下なる鱈雲
彼岸花を離れてからが存在かな
花もつ蓬君も花もつ蓬うしい
彼岸花きょうは赤くて驚きぬ
霧の日の明神岳は霧か聴こえる
コスモスの初花を拾い拾い
虎杖の穂花は天井の如しよ

13

2/3

(2001)

このころ草に寒い日金か入りはじめて
 寄ってくる塩辛とんぼの青い目玉
 軸まで赤き曼珠沙華がありけり
 おはぐろは裸の蜻蛉つるむべし
 魚むく人の旅客機自爆テロかな
 曼珠沙華の世界標準などと言ふな
 ぼくはギョギョシギョギョシとは鳴けぬよ
 曼珠沙華のあたりを落とす
 芙蓉の花は花粉まみれで行かん
 おんいばったのもう動かぬを宙に置けり

白曼珠沙華は歯である寝て見ている
 大女郎蜘蛛は数日揺れておりぬ
 痺れる左手槓の笑はまだ赤くならぬ
 秋雲の頬をひかるものか外に
 葎のヤ化人を殺すんなら代るよ
 すいちよんと鳴いているのはわか百舌く
 かわらけつめの莢に世界か入りはじめて
 虫ぶみの白と黒打ち花野かな
 鶯は眉間呆と空気に当てているよ
 濁っている軽鴨の首なかきかな

9/14

野良猫が	刺蛾で	卵茸トウ	テロル	九月蟹足	天の川	おしろい	雁来紅	ひと	穂の木
が	で	トウ	マ	と	は	の	と	と	の
ピ	に	ー	ハ	カ	中	の	口	こ	花
ピ	緑	と	れ	ケ	国	実	に	ろ	ま
と	の	ほ	ほ	ン	あ	か	出	は	で
来	沙	ど	ほ	の	た	次	し	明	の
こ	漠	は	あ	森	り	と	こ	神	距
い	と	か	れ	ほ	で	乗	ほ	岳	離
る	言	に	と	ど	折	り	切	の	が
木	う	存	妻	に	れ	ほ	れ	痕	花
権	べ	在	子	積	ん	い	て	露	子
か	き	す	か	め	と	め	ゆ	の	り
な	なり		な	り	す	た	く	色	
								ほ	

9/16

18

垂れる	二人	かる	人	へ	秋	夏	あ	花	ぼ
だけ	で	か	は	く	日	過	き	野	ろ
垂	見	も	人	そ	は	ぎ	の	と	ろ
れ	る	道	を	か	テ	て	の	言	の
て	と	か	憎	ず	ロ	な	の	う	時
茹	の	わ	め	ら	の	百	の	に	の
子	さ	せ	の	が	日	日	の	は	畑
や	ま	み	ま	宙	球	紅	か	青	と
胡	ば	道	つ	を	形	た	ゆ	い	い
瓜	つ	や	よ	跳	ビ	る	ら	花	ら
子	た	石	い	ん	ル	こ	ゆ	ぼ	べ
り	半	の	い	で	と	と	ら	かり	き
	分	艶	い	いた	かな	かな	出	か	も
	の		い	た			て	な	の
	顔		い	よ			きた		
			い				る		
			い				かな		

17

9/15

(2001)

思蜘蛛巣を張る目の大きな子が帰った
 螢光灯と平行に寝て銀河かな
 寒いけど壁に體をつけて寝るよ
 寝ていると逆流するもの天の川
 秋の夜の文庫本論語のかたちかな
 秋の夜や座布団を二つに折って殺す
 ぼくはエロキユリアン青かなんぽんぽん
 こまきれ羊羹かどかど乾き天の川
 厚き小さい針落ちている秋の道
 テロル磨かるべし明神岳が霧で見えぬ

仙人草花から髪へ犬の声
 思蜘蛛のかたまりか澄むことかな
 青路鳥は羽をうごかしずれてゆけり
 菌を磨けあきののげしほ花を磨け
 かまきりほ四回脱皮す流れてゆく
 月か馴れて九月の雨は二階よりす
 秋の出水の痕は抱きしめたい高さ
 ブルベリジャム皿にのせ灯下親しむべし
 秋の夜のテロル抜かれたた^か衣^だ置かな
 夏風知かまだ残り腹鳴らすなり

陰毛など拾ってから銀河家に入れる
 明神岳は青鷺の青き時に有り
 芒いまが一重小鷺の咽喉も一重
 音楽学校秋の緑は猛きかな
 ちようばんぼうの尾に浴ってゆく秋の川
 存在や紋蕙揚羽を吹き上げて
 ほくうささくれ一夜草の一夜とせん
 秋天の剣とものは過ぎてゆけり
 洋種山牛蒡を葎中に浴け裸かな
 羞しくてくる鶺鴒の眉間はテロの眉間

ジーンズ剥いている膝かまどうまの丸さ
 眠い體にいくつも細い星が見える
 街灯近く天の川ほど白い猫
 眠い體に銀河交いりて定かならず
 眠い自転車押せば押しこる天の川
 眠い體が虫の顔を見ていたり
 四日間は眠れぬ體に虫を鳴かせ
 大学入試へ虫のような顔はするな
 灯下蠅取蜘蛛とほくの身かな
 眠い體が蜘蛛は鳴かないなと思ふ

おはぐろ蜻蛉は軽かれて青く散って青く
 秋の日や川鷺の白さ群れて止まる
 鷺群の白さ白くて冬に入るか
 九月は身に覚えなき傷愛おし
 夏椿の実ほもうなくて日日の音
 稲田日ごと欠けていきたるか響くよ
 平家と打つ大粒の秋の雨らし
 螢光灯残像は沙漠虫の夜
 ほくろ秋に入るふくらほぎむとっふたつ
 夜は従えてとつくり蘭と虫カレンガ

9/21

ヒーマンの真赤な日なり生きてあれば
 鷹の爪真赤な昼や天の川
 土に降りたおはぐろ蜻蛉風吹くなり
 秋の日や道打つ影に葡萄の色
 道の影モンゴルの秋からは遠いよ
 道打つ影に曲線の優ほ欠けたる
 秋風や道打つ影にあばらの鳩
 秋日に暴れ計器はことごとく凶なす
 彼岸には三日が過かてほくに落ちる
 刈田の鷺は頼き鳥に入りりけり

9/20

こ	三	自	自	自	自	自	自	自	自
ハ	日	転	転	転	転	転	転	転	転
ハ	月	車	車	車	車	車	車	車	車
ハ	の	二	二	二	二	二	二	二	二
ハ	裸	人	人	人	人	人	人	人	人
ハ	形	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗
ハ	と	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ
ハ	い	坂	い	の	腕	同	天	の	一
ハ	う	下	ま	夕	巻	い	の	リ	に
ハ	と	と	は	バ	く	ズ	に	乗	る
ハ	見	き	酒	ッ	と	ボ	乗	る	こ
ハ	て	か	精	火	き	ン	と	と	と
ハ	い	頂	の	は	は	と	巻	い	て
ハ	る	い	か	一	腕	巻	い	て	い
ハ	る	る	た	つ	子	い	て	い	る
ハ	る	る	ち	に	で	い	る	る	る
ハ	る	る	か	見	い	る	る	る	る
ハ	る	る	な	ヤ	る	る	る	る	る

9/23

26

夕	読	彼	枇	栗	冷	冷	冷	秋	秋
バ	経	岸	杷	加	雨	雨	雨	の	の
ッ	を	花	の	疎	に	に	に	冷	冷
火	巡	を	蕾	ら	濡	濡	濡	雨	雨
よ	る	分	は	に	れ	れ	れ	か	の
り	曼	け	や	残	て	て	て	か	の
赤	珠	て	か	る	夕	眠	眠	か	類
い	沙	乗	た	栗	バ	い	い	濡	に
星	華	る	ま	の	ッ	目	目	れ	あ
が	オ	を	リ	木	の	に	に	て	る
家	ト	風	と	の	下	は	は	い	雨
間	ト	と	し	下	なり	時	時	る	は
に	バ	せん	て	な		な	な	か	固
	イ		あ			か	か	な	し
			り			れ	れ		
			ぬ			る	る		

25

9/22

(2001)

日輪	ラ	ラ	ラ	虫	ラ	虫	ラ	名	半
の	ル	ル	ル	は	ル	は	ル	月	月
石	ク	ク	ク	人	ク	人	ク	の	を
榴	の	の	の	間	の	間	の	名	少
と	酔	酔	酔	ラ	酔	酔	残	リ	し
言	っ	っ	っ	ル	っ	っ	に	傾	傾
わ	ほ	ほ	ほ	ク	ほ	ほ	夕	け	け
ん	ら	ら	ら	の	ら	ら	バ	会	会
泣	い	い	い	酔	い	い	コ	い	い
く	歌	歌	歌	っ	歌	歌	火	に	に
な	か	や	か	ほ	か	か	を	行	行
か	ゑ	虫	な	ら	な	な	銀	く	く
れ	と	の	虫	い	足	足	河		
	を	こ	を	歌	高	高	か		
	開	と	愛	か	蜘蛛	蜘蛛	な		
	く	く	す	な					
	る	る		歌					

9/26

28

習	日	秋	秋	さ	こ	こ	こ	こ	こ
間	月	晴	晴	く	か	か	か	か	か
紅	夜	や	や	ら	か	か	か	か	か
き	人	母	母	群	ね	ね	ね	ね	ね
鳥	間	は	は	落	や	や	や	や	や
か	は	夕	夕	ほ	ま	ま	ま	ま	ま
か	く	バ	バ	む	ど	ど	ど	ど	ど
な	間	ッ	ッ	と	り	り	り	り	り
む	の	吹	吹	の	虫	虫	虫	虫	虫
ぐ	家	う	う	音	の	の	の	の	の
ら	に	子	子	か	歯	歯	歯	歯	歯
と		ら	ら	す	あ	あ	あ	あ	あ
巻		は	は	る	と	と	と	と	と
る		薄	薄	よ	固	固	固	固	固
よ		荷	荷		い	い	い	い	い
					黄	黄	黄	黄	黄
					色	色	色	色	色

9/25

9/24

(2001)

頸椎を吊って秋風は秋よりす
 頸椎を吊って私ほ朝顔めく
 頸椎を吊って柘榴百生る木と
 頸椎を吊って無月の日にありぬ
 頸椎を吊って露の頸のあたり
 頸椎を吊れば薄荷の花にあたる
 頸椎を吊るかま徂ま紅いの看護婦たち
 頸椎を吊ってなだれて秋の花
 頸椎を吊っていぼ草曳いて帰る
 杜鵑草咲き揃う人顔さだす

30

9/28

襖をよそ虫の夜虫のひかりを溜め
 落ちている蜻蛉は蜻蛉の色と湛え
 かまどう子の馬と出会えり台所
 鈴虫を吸めないように正座して
 冬蜘蛛掌に込めるともう走れぬ
 土蝗を見たとき信じて競輪へ
 白鶺鴒のかくも群れる時に出たり
 いぼ草の君らの秋空はあるなり
 蓼野なり風は夜も吹くなり
 頸椎に吊られて赤のまんまの上

29

9/27

(2001)

小鷺か魚香む知らない同志がキスするなり
 泣くことほ生れること蛾か来ている
 虫の夜や泣いていると泣きにくる
 雨戸引くにうすたひ蛾厚さあり
 うすたひ蛾の完璧を自転車に移す
 うすたひ蛾の完璧を自転車に移す
 窓につく羽厚さのうす薄さのら
 芙蓉五弁きのうの塊となりおる
 銀河してことばは人間を先いゆく
 蟋蟀のこのごろ足が小さくなった

32

9/29

木槿もて女子籠球部頭と打てり
 夏から秋へ女子籠球部頭とくだき
 女子籠球部系仇のあたりでぐるぐるす
 女子籠球部は朝の半月を毀つよ
 橋上のほくうとオリオンの半身と
 オリオンの半身はまだ地にありぬ
 橋上の月はこくと額にあたるよ
 ひと二人かちようど入る金木犀
 蛾の雨戸は人と人との境にあり
 銀河煩わし夜は青いものと

31

(2001)

